

即召頭辨季仲仰其旨了、申刻上達部分散、廿二日己巳、殿下、余著冠參内、寢殿御裝束了、透垣邊曳幔幕云云、未曳以前罷出、延久元年有立后事、用件日記云云、有別記、

〔玉海〕文治五年四月三日癸亥、略中今日戌刻、自天王寺定能卿傳院宣、余女子子在入内事、聞食了、假

雖他人令申、如是令申上、不可及異議、况無他人申事、早可致沙汰、又有宸筆勅報、其趣惟同、歡喜之思、

千廻萬廻也、略中六年正月十一日丙寅、此日攝政太政大臣實兼長女、從三位任子有入内事、生年十八

余四十二蓋依長保永久例行之、略中十六日辛未、取御插鞋納余辛櫃、又取御衾納御辛櫃、此日御書使、

主上渡御、女御宣旨、女官祿等也、先女房等著裝束、紅梅白參之、略中四月十四日、此日立后兼宣旨也、

羽后勅使成經朝臣、余自取祿、略中廿六日己酉、此日冊命立后也、以女御從三位任子爲中宮職、

子細在別記、廿七日庚戌、立后第二日也、盃酌如常、廿八日辛亥、立后第三日也、又御書使、實朝臣啓

陣還祿氏院參賀、廿九日壬子、今日雖可撤御裝束、依日次不宜、明日可撤之、

〔増鏡三藤〕寛喜元年になりぬ、此ほどは光明峰寺殿、道家又關白にておはす、この御むすめ、河后璋

子女御にまゐり給ふ、世の中めでたくはなやかなり、略中やがて后立あり、寛喜二年藤つぼわ

たりいまめかしく住なし給へり、略中おなじ三年七月、關白をば御太郎教實のおといにゆづり

聞え給て、わが御身は大殿とて、后宮の御おやなれば、思なしもやむことなきに、御子どもさへい

みじうさかへ給さま、ためしなきほどなり、

〔平戸記〕仁治三年八月九日己未、早旦頭辨來問今日事、今日女御姑子、前右大有立后事、后内辨

大納言具實卿、宣命使左衛門督顯親卿云々、節會了於御前、被行宮司除目、内辨候執筆云々、藏人方

事、左衛門權佐經俊奉行、本宮事右少辨時繼奉行、晚頭頭辨來訪宮司間之故實、不經程歸了、

宮司除目

中宮大夫藤公相兼 權大夫藤實藤兼 亮平時高兼 權亮源顯房兼